

右手一本、竹刀にかけた青春

可能性信じ 努力に努力
三段の昇段試験にも合格

昨年六月の県高総体剣道団体戦。

右手一本で竹刀を振るいながら、全力で試合に臨む剣士がいた。佐世保工の池田泰輔（三年）、十八歳。身体的なハンディを抱えながらも、自らの可能性を信じて努力を重ねてきた高校三年間。試合後、高木志伸監督が声を掛けてくれた。「片手でよくここまで頑張ったな」。結果は予選リーグで敗れたが、少年の胸は充実感でいっぱいだった。



提供：長崎新聞社

「分娩まひ」。出産時、医師が左手を無理に引っ張ったことが原因とみられており、左手の握力がゼロに近い状態で生まれたという。

母、知子さんはショックを必死で抑え、それを受け止めた。決して甘やかさず、衣服の着脱など何でも一人でやらせた。結果、幼いころから人の痛みを分かろうとするようになった。苦しさを表に出そうとしなかった。「周りに迷惑をかけたくないと思っていたんでしょね」。知子さんは当時は振り返る。

忘れられない出来事がある。幼稚園の時、お遊戯会の練習から沈んだ顔で帰ってきた。「僕の体、思い通りにならない」。あの時の表情は今でも忘れることができない。思い出すと涙があふれる。幼いながらも気丈に振る舞ってきた息子。どれほど多くの我慢をのみ込んでいるのか。心が痛んだ。「でも、本人が乗り越えるしかないんだ」。接し方は厳しかったが、息子を信じた。成長を願った。

出会い

剣道を始めたのは小学五年生の終わりごろ。家族で見っていたテレビ番組に片手がない力士が

登場した。「泰輔も何かスポーツをしてみれば」。知子さんの勧めがきっかけだった。「剣道なら片手でも努力次第で上達できるかもしれない」。近隣の道場を探し、相浦武道会の門をたたいた。

最初は一般的な中段の構えから始めた。左手は添えるだけ。技を放つとどうしても竹刀から左手が外れる。体のバランスが取れず姿勢が崩れることもあった。「心・技・体」が一つになって初めて一本が認められる剣道。技は決まっているはずなのに、なかなか、一本にならない。右手だけでの攻防も苦勞した。悔しかった。帰宅後の素振り、筋力トレーニングが日課になった。

「もうやめようか」。そう考えたこともあったが、高校二年の夏、大きな転機が訪れた。高木監督の勧めで挑戦した右手一本の上段の構え。「自分のものにすればおまえの武器になるぞ」。高木監督はあるDVDも見せてくれた。上段の構えの隻腕剣士の実話だった。体育教師を目指して勉強を続け、全日本学生選手権の地区予選を戦う大学生。「自分もこうなりたい」。これまでの何倍も努力を重ねた。秋の新人大会。ついにレギュラーの座を勝ち取った。

努力したのは剣道だけではない。両手でも大変な細かい作業をこなし、第二種電気工事士の資格を取得。三年の秋には就職も決まった。剣道で身につけた礼儀作法と集中力。この二つを

生かして仕事に励みたいと思う。

仲間

「障害はそんなに苦ではない」。今、心からそう思えるようになった。それを教えてくれたのは仲間たちの存在。この三年間、両手が必要な作業を、普段通りの表情でやってくれた友人たち。申し訳なかったが、うれしかった。頼もしかった。「おかげで周りの生徒たちにも思いやりが出てきた」(高木監督)

高木監督からいつか言われた言葉がある。「見ている人に勇気を与えるような存在になってみらんか」。剣道を頑張ること、そうなたとまでは思っていない。けれども、自分が目指すべき道は見えてきた。将来の自分を思い描き、少年はこの春、新しい門出を迎える。

平成二十年一月九日『長崎新聞』より